

ここに記している人は、本人がもつとも多くを学んだことを意味するのだろう。師匠として名前が出る頻度の多いものは次の通りである。牧春台（二名）、大石良英（二〇名）、野口槐庵（二四名）、嶋本龍嘯（二四名）らである。いずれも佐賀藩医である。他に藩外の医師に師事した者もいるが、その数は少ない。

免札を受けた者の年齢についての調査結果は次の通りである。

年度	二十代	三十代	四十代	五十代	六十代以上
嘉永五	〇	一三	一一	四	二
六	一二	四三	五九	三九	一一
七	二五	五三	二八	一五	七
安政二	二五	二四	二六	一三	九
三	二四	一六	一四	三	二
四	二九	一二	一六	〇	一
五	二八	二五	四	六	三
(計)	一四四	一三三	一六〇	八〇	三五

五十代になると、その数が急減する。

(順天堂大学医史学研究室)

幕末における医学研修

深瀬 泰 且

昨年第八四回総会において、明治初年の医師履歴書綴りである『当区医務取調書上』と、『医者履歴明細書』について報告したが、そのこまかい内容についてはふれるところが多かった。本総会においてはその内容について考察を加え、あわせて飛騨国〔筑摩県医師連名簿〕および三河国〔明治初期豊橋医師履歴〕の同様の文書についても検討した。

川崎市域の両文書には、それぞれ一八名、一六名の医師が記載されているが、一五名は両文書に共通しているもので、計一九名の医師の名が見出される。この一九名について、氏名、年齢、住所、医学研修の開始時期、その指導者、研修の内容(用いた医書名)、開業した時期などがしるされている。

同一人物について両文書を比較すると、その経歴に差異

をみとめるものもある。わずか二年の間隔があり、それも自筆と思われる履歴書でありながら、このような異同を見出すのはいかなる理由によるか明らかではない。本履歴書が必ずしもその医師の自筆によるものではなく、信頼するにたらないとの意見もあるが、政府へ提出されたこれらの文書が、まったくでたらめであると決めつけるのは、いささか速断のきらいがあるといえよう。

三地域の文書を比べてみると、川崎市域の文書はほとんどが自筆であると考えられること（他の二者はすべて同一筆蹟によって書かれている）、医学の研修期間だけでなく、その内容が詳しく書かれているということが、大きな特徴といえる。川崎市の例のような文書は、ほかにその例をみない。

神奈川県第五大区（現在の川崎市の北部地域）の医師の数は一九名である。このころの人口は三七ヶ村一五、九八八人であるので、人口十万人に対する医師の数は一一九となり、当時の日本全国の平均六六人を大きくうまわっている。医師の数からいえば、第五大区は医療の過疎地域では

なかったといえる。ちなみに第五大区に相当する川崎市域の、昭和五六年のそれは一六一人となっている。

一九名の医師を漢洋別に分けると、洋方二、漢方一二、漢洋医五で、洋方対漢方の比は二対六で、全国の一対二・九に比べ、漢方医がはるかに多い。

医学研修のため入門した年齢は、一一歳から三四歳に及び、平均一六・四歳であったが、一九名中一六名（八四％）が一〇歳代で入門している。

その修業年限についてみると、最短三年一ヶ月から、最長は一四年八ヶ月に及び、その平均は九年八ヶ月である。一〇年以上にわたって修業をつんだものは一二名（六三％）を数え、九一〇年の修業のち開業するものが多い。

開業時の年齢は二〇歳代がもっとも多く、一二名（六三％）を数える。平均年齢は二六・八歳である。これによってみると二五歳前後に医の道にはいり、まず医書を読みこなすだけの漢学の素養を身につけ、約一〇年間修業して二五歳ごろ開業する、というのがおおよそのパターンということができる。

この一九名の医師たちは、都合二九名の医師について医

学を学んだ。一人平均一・五人の師についている。江戸一五名、川崎市域八名、その他として、大阪、京都など六名となっている。一方、一九名のうち、川崎市域のみで修業したものはわずか三名（一六％）で、一四名（七四％）が江戸に出て修業している。

その師の名を列記してみると、江戸では大槻俊斉、久志本主水、手塚良斉、手塚良仙、成田恒斉、美濃部浩庵、山田昌栄らがあり、京都には宇津木昆台の名がみえる。

修業の内容は、いわゆる本道とよばれている内科が圧倒的に多く、一七名は内科である。八名が外科を兼ね、産科を兼ねているのが四名、整骨を兼ねるのが一名である。

そこにあげられた書名をみると、『金匱要略』『傷寒論』が多く、ほとんどの医師がいわゆる古方派である。一方漢洋折衷あるいは洋方では、フーフェランド内科書、チソット内科書、ホルン産科書がみられる。ただ一名の眼科医（杉原弘重）は、天保一〇年から摂津の旭桂山に入門して『眼科錦衷』を学び、つづいて弘化四年からは京都三条の西尾良斉について『銀海精微』を研究している。

江戸末期に医学を修得しようとするものは、手近な在所

ではなく、良師をもとめ、笈をおうて江戸や京都に遊学している事実を知りえた。いまは歴史の彼方に埋没してしまった名もない医師たちではあるが、その真摯な勉学態度がこれらの履歴書からよみとれるのである。

（順天堂大学医学部医史学研究室）